

民俗博物館だより

Vol. V No. 4

1979. 2. 5



山の神 (下北山村大小井)

目次

大和の民家～分布と平面の分類～	1
弓打ちとケイチン(大和の民俗行事)	5
雨乞いと人形(フィールドノート)	7
博物館事業報告	10
寄贈民俗資料分類目録	12
お知らせ 他	15

大和の民家 ～分布と平面の分類～

長谷川晋平

1. 概 要

奈良県下には、古い民家が全国的にみても多数遺存し、なかでも19世紀前半に建設された民家は、おびただしい数が残っている。そのなかには、一般の民家とは趣きがやや異なるが、16世紀に遡るとみられる西吉野村の堀家住宅（県指定文化財）、あるいは日本最古の棟札（慶長12年）をもち、建築年代が明らかな五条市五条町の栗山家住宅（重要文化財）など17世紀に遡るものも少なくない。なおこれらの民家は主屋のみでなく、附属屋とともに屋敷構えがよく保存されている大型民家が多く、それらは時代が下るにしたがって、大和棟になる傾向が一般的である、それらは盆地（国中）とその周辺部に多く見られる。

奈良県の民家は、盆地では一般に、四間取あるいは六間取の平面になるが、山間部では三間取ならびに、それから発展した四間取が多い。平面の形式自体、18世紀までは別系統に属していたものと思われ、奈良盆地と山間部の民家は併列して発展したものと思われる。両者が交流・融合したのは19世紀になってからであろう。

それらのほか古民家は、単体としてはもちろんのこと、歴史的景観を保持している集落や町並としても多く残っていて、簡単な予備調査では県下に約200カ所あることがわっている。奈良市・大和郡山市・橿原市今井町・五条市五条町及び新町などが代表としてあげることができ、なかでも吉野川の北岸にある街道ぞいに、古くから発達した交通の要衝の町で、商業・宿場の町と発展してきた五条市五条町及び新町がある。この町筋には17世紀から18世紀の古い民家が多いことと、その古さにおいて全国第一位に位置づけられている。また橿原市今井町は、戦国時代末期から一向宗の御坊である称念寺を中核として発達し、商業都市としても栄えた寺内町で、もとは周囲に濠と土塁を設けていた。そのなかの民家は江戸時代に建設されたものの約420戸あ

って、これらは伝統的な景観を極めてよく残し、我が国の最も代表的な都市型の町並として高く評価されている。

町家平面と農家平面を古いもの同志比較すると、17世紀に遡るものは、構造自体異なっているが、平面的にはあまり差がないように思われる。これら古いものは大型住居で、町家・農家とも広い土間をもつ点も似通っているが、それは大型住居の特性であって町家・農家の差ではないかもしれない。

これらの点について、県下の民家を通観してみよう。資料として挙げる民家には特殊なものがあって、必ずしも分布にしる変遷にしる、地域あるいは年代がきれいにわかれるわけではないが、一般的傾向として認められることがらをとりあげたいと思う。

2. 分 布

奈良県下の各民家の建設年代別の分布は、19世紀のものは県下一円に分布し、18世紀のものはその密度が低いだけで同じように分布する。17世紀に遡るものはその数が少なくなるのが当然であるが、これらの点に在るのは奈良盆地の南縁部に多い。

農家について平面形式別に分布を調べると、18世紀以後の基本形式は四間取になるが、古いものには前座敷をもつ三間取形式がみられる。この形式の農家が遺存するのは、山間部の添上・山辺両郡と吉野郡西吉野村・東吉野村で、この地方では、三間取の前座敷が四間取りへと分化して成立した。山間部の宇陀郡や西吉野村・東吉野村をのぞく他の吉野郡の町村では、三間取平面をもつ民家がみられなかったが、とくに古い年代に建設されたものがなかったためでもあり、これらの民家が三間取からの発展でなかったとはいきれない。これら山間部の四間取民家では、棟束をたてる叉首組がみられ、奈良盆地と構造的にはやや異なる。なお、吉野郡南部の山間民家は、構造は束立の和小屋であり、杉皮葺・板葺等の緩い屋根をもつ。土間部分は小さく、この

地域の民家も別系統のものと認められる。

山間部の四間取に比較すると、奈良盆地の平地型の四間取は整形が多く座敷まわりが一般に整っている。また土間のカマヤ部分も煙返しをつけるなど独立する傾向をみる。山間部型の農家では土間の妻側に出入口を設けている例が多いが、平地型の農家では、正面大戸口に対して背面にも出入口を設け、居室部に沿う土間が通り庭式になる。また平地部では、18世紀後半から四間取平面が発展して六間取になる例が多いが、これは座敷まわりの整備のため、桁行にのぼした結果とみられる。なかには、このような横長の六間取に対して梁行に拡張する六間取もある。

19世紀になって大型住居としてつくられた梁行の広い六間取とちがって、古い時代から土間沿いに3室並ぶ六間取平面をもつ大型住居も平地型の民家にみられ、この分布もとくに地域が限定されずに各所に点在する。これらはいずれも広い土間をもつ。これに先行するのが土間沿いに2室並ぶ五間取の民家と考えられる。

町家の平面は農家と異なって、土間が一般に小さく、通り土間のものである。町家には間口制限があったためか、梁間の広い平面が多く、土間沿いに1列3室並ぶ小型の町家の間取や、間口が広がって2列4室～6室並ぶ間取が一般的である。これらの町家にあつては、天井裏が「つし」から部屋に整備されて、18世紀後半から2階建となるのが各地でみられる傾向である。なお五条市の町家は、奈良市・大和郡山市・橿原市の町家と平面は似通っているが、五条市の町家ではカマヤやザシキが主屋から突出る角屋となり構造が異なったものとなる。なお町家のなかで、道路

に面する表部分が間口全体にわたって土間になるものもみられるが、職種によるものと思われる。町家で17世紀に建設されたものは比較的土間が広いのが目立つ。この傾向は各町に共通し、同時期の農家と平面は大差がない。

3. 平面の分類

奈良県民家の平面の分類をすると、

- (1) 大型住居にみられる古式な五～六間取
- (2) 平地部でみられる喰違四間取
- (3) 平地部のほとんどの民家にみられる整形四～六間取
- (4) 東部山間地でみられる三間取
- (5) 東部山間地でみられる喰違い四間取と整形四間取
- (6) 吉野川流域の喰違い四間取と整形四間取
- (7) 西吉野地方の三間取
- (8) 西吉野地方の喰違い四間取と整形取間取
- (9) 十津川地方にみられる桁行に長い間取
- (10) 北山地方にみられる三～五間取

の10種類にわけられ、このなかで(2)・(3)は同系統であり、また(4)・(5)や(7)・(8)も同系統であるとされる。

農家であっても中世武士の系統をもつ上層農家や大庄屋の民家(A型)では、一般農家の変遷と様相を異にし、江戸時代初期から四間取を成立させていたが、これら上層農家とあとのべる町家(F型)を除くと、奈良県民家の平面は、十津川地方の南部山間地の地形的制約を受ける平面(E型)と、それ以外の地域での構造・外観・屋敷構などによって奈良県の人文地理上の3地域にほぼ対応して分けられる前座敷型の平面(B型～D型)とにわけることができる。それらを大別すれば、B奈良盆地(図B₁, B₂)、C奈良盆地の東部山間地



(第1図) 奈良盆地の町家

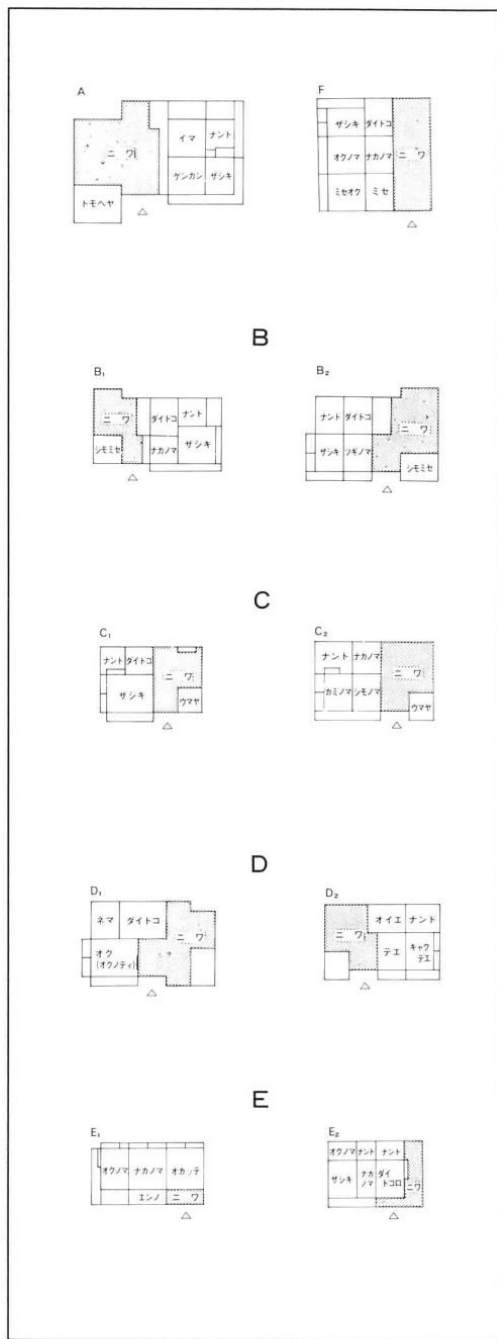


(第2図) 吉野山間地の集落

B型～D型の前座敷型の平面をもつ一般農家では17世紀に遡る二間取・三間取の遺構はないが、18世紀前期の例があり、古式な間取として興味深い。すなわち、上層農家の早い時期の四間取とは別系統として、一般農家では前座敷型二間取・三間取があり、それを前身型式として18世紀から19世紀にかけて四間取へと移行していくことが考えられる。**C型・D型**では三間取から四間取への移行を裏付ける江戸時代前期の三間取民家がある。**B₁B₂**の間取は奈良盆地の各地に分布し、近世を通じて続いた県下の代表的な間取である。**B型**の農家は大阪・河内、京都・南山城にまで分布している。**B型**の喰違い四間取は**B₁**のように梁行に喰違うのが通常であり、一方の**C型・D型**では桁行に喰違うのが普通である。ダイドコロに注目すると、**B型**ではダイドコロから土間に板縁を張出すが、**C型**には板縁がなく、**D型**ではダイドコロは土間に張出した1室として設けている。

A black and white photograph of a traditional Japanese thatched-roof house (machiya) with a steep, gabled roof, surrounded by trees and a stone wall in the foreground.

(第3図) 東部山間地の農家



(第4図) 奈良県民家の平面模式図

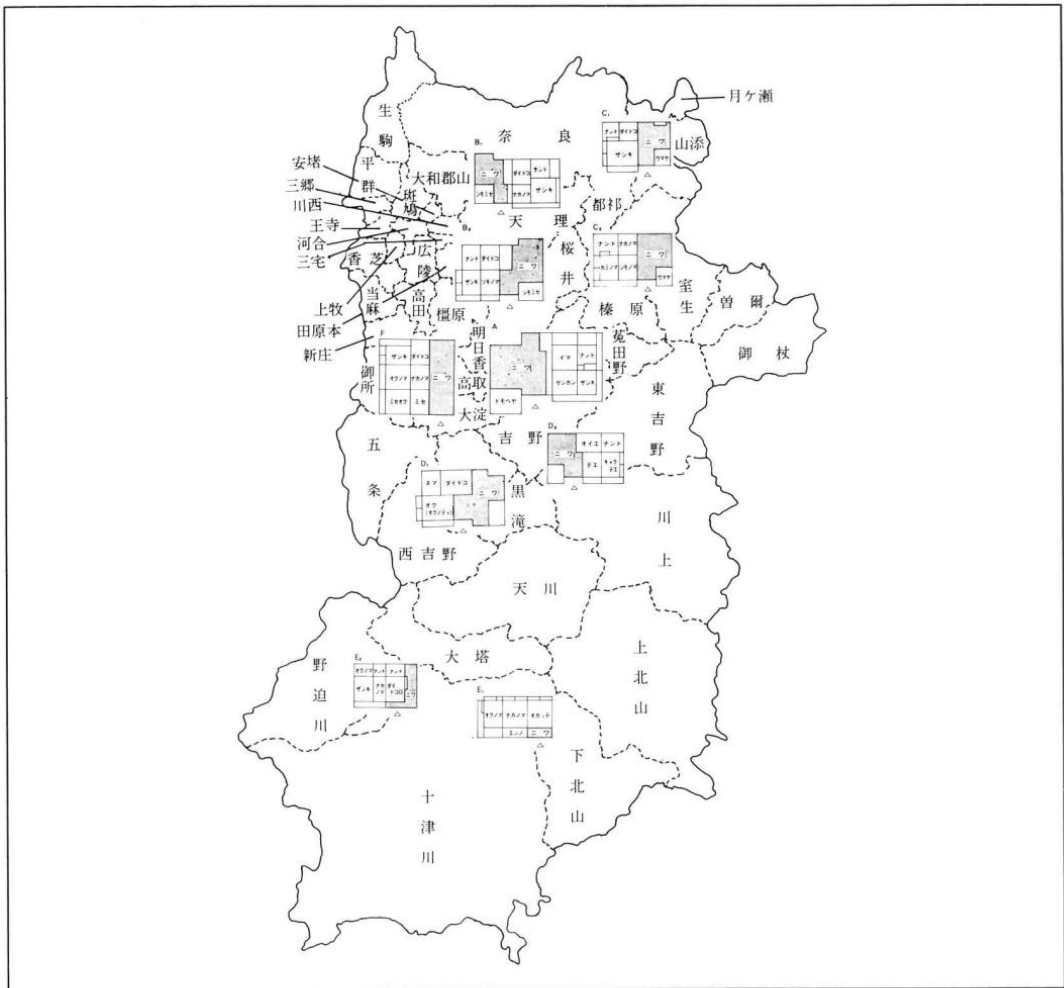
とする民家もある。なお野迫川地方の民家では江戸時代はほとんど草葺であったものを明治時代に板葺に変えた家が多い。復原すると榎首構造・草葺となりE型に分類しないで、隣接する和歌山県山間部に分布する間取と考えることも可能である。

B型については大和棟の成立についての問題がある。B型には現在大和棟が多いが、当初から大和棟である家と、改造して大和棟になっている家がある。奈良盆地の17世紀に遡る民家では復原すると寄棟になり、大和棟はない。上層農家で大和棟が確実にあらわれるのは18世紀中頃であり、それ以前に建てられたと考えている民家もやはり18世紀中頃に大和棟に改造している。大和棟は上層農家では18世紀中頃に成立し、次第に一般農家で採用され始め、江戸時代末期から明治時代に広く普及したものと考えられている。こうして奈

良盆地では江戸時代後期に、B₁、B₂の四間取で大和棟という奈良県を代表する民家があらわれ、その伝統が最近の住宅にまで影響を与えている。

奈良県下では、年代が確実にわかる民家が現在約100棟ある。この数は調査が進めばもっと増加するであろう。17世紀の年紀を持つ民家は、慶長12年(1607)の日本最古の棟札を持つ栗山家住宅(重要文化財)をはじめとして県下で計8棟あり、18世紀前半の民家は13棟、18世紀後半では22棟ある。

以上、「大和の民家」一分布と平面の分類一として、民家の分布とその平面分類をとりまとめたものであって、それらは『奈良県文化財調査報告集第13集・民家緊急調査報告書』と『奈良国立文化財研究所年報・77-奈良県民家調査一』を参照した。



(第5図) 奈良県民家の平面分類分布図

弓打ちとケイチン

浦西 勉

農村では正月から2月にかけて弓打ちを行なうところがあり、今回この行事を紹介してゆこうと思う。弓打ち行事は、宮中で射礼とよばれて行なわれたのは古くからのことであるが、ここでは直接この射礼には触れない。

さて、2、3の弓打ち行事を報告書からひろいあげてみることにする。

① 都祁村南之庄

1月20日にケッチンという座が行われる。(中略) 行事は神社で行なわれるのであるが、宿では歓楽寺の僧が正座にすわる。そして弓、矢などをつくり、クリの木のウズの長いもののさきに、米を紙につつんだのをつけて、それを天王さんにそなえ、神饌をそなえて坊さんがお祈をする。そのあとで竹であんだものに鬼と書きそれを的にして頭人が弓で射るのだが、その時先づウシトラ及び各方角に射て最後に鬼の的に射る。^(注①)

② 都祁村下深川

2月10日に柳のオコナイという行事がありそれが終わってから鬼打ちがある。

朝から帝釈寺の境内でミヤコズカイをしている堂下(ドウゲ)と寺の小僧がマトハリ(80cm四方の竹枠に白紙を貼り、中央に鬼の字を書く)とドモの木で長さ1.1mの弓、長さ60cmの矢60本(牛を飼っている家へくばる)をつくる。鬼打ちは神野寺の僧侶が矢竹をつかい、天地、東西南北、鬼の目の順に射る。^(注②)

ところで、なぜこのような行事が行なわれたのかという問に対して、三郷町南畑では次のような伝説がある。

毎年旧正月27日に、14歳か15歳の娘さんを供えなければ毘沙門さんが暴れるというので毎年娘を供えていた。その娘は鬼に食べられると言う。ある年娘のかわりに、村の力の強い者が娘にばけて供えものになった。そして娘を食べるという鬼を弓で打ち殺してみると人間が鬼にばけていたのだという。この時から弓打ちが始まった。今でも4月の第1日曜日(もと旧正月27日)に桜の木で、シノ竹12本(閏年は13本)をつくり、鬼の的に弓

打ちをする。宮座に入った一番若い人2人が弓打ちをする。^(注③)

上記したのは伝説であるが、ここでは鬼をにたとえている例が他の地域との共通性をみることができる。最初に紹介した弓打ち行事の的もそうだがその他、室生村染田のこの行事をオニノメノタマウチと呼んでいる。また、田原本町北阪手の弓打ち行事に読みあげられた「結鎮祭文」によれば、天地、江河、大海、高山陸地を虚空のごとくにしてしまう豹尾神またの名を広悪神を、白鯨王が退治したのを記念して、豹尾神の目を結鎮の的にしたという内容が記されている。また桜井市鹿路でも同じ内容のものが読みあげられ、豹尾神を鬼とも記されている。^(注④)このように見てくると、鬼を退治してそれを契機に弓打ちが始まったという伝説はあちこちにあったように思われる。ではこの行事は日本に昔、実際に鬼が住んでいたこれを退治した記念的な行事かというところではない。これはあくまでも作りあげられた伝説であると思う。桜井市鹿路の結鎮祭文は「享保二年丁年正月」に僧侶により作製されたものであり、また田原本町北阪手のものは、「寛政五年丑正月調之」とあり、北阪手の天王山西之坊に住でいた、恭嚴法印とい僧侶が作製したものである。ところでこの鬼を退治した話を記した「結鎮祭文」の目的は、鹿路の例をあげておくが、末尾に記されていることにつきかと思う。

今年頭明年頭一結之諸衆通俗男女貴賤上下皆(中略)一切諸難他方世界拂大施主耕作風雨順時五穀成就萬民豐饒牛馬六畜一粒萬倍祝穴賢々々^(注⑤)

上記したとおり、五穀豊饒と万民の無災を祈ったものである。つまり鬼を打って退治した伝説と弓打ち行事とを同時にひろまり、それは五穀豊饒と万民の無災を願うものであったと推定できるかと思うのである。

ところで、この行事がいつごろから行なわれたのか、またどのような人々によって保持せられた行事なのかを若干ではあるが次に触

れておくことにする。

まずいつから始ったのかであるが、香芝町下田の鹿嶋神社の「座衆経営録」によると、

十六日結鎮庄厳之事、附弓的舞樂等と見える。この記録は天治元年(1124)の年号がある。この資料を信ずるとすれば、平安末期には、行なわれていた事になる。

次に、この弓打ち行事がどのような人々に保持せられて今日まで行なわれて来たのかを見ることにする。最初に紹介した都祁村南之庄の弓打ちでは、ケイチン座を営むとあったが、上記した香芝町下田の場合にもケイチンという名称が出てくる。また桜井市鹿路、田原本町北阪手で読まれるのも「結鎮祭文」であり、この名が出てくる。その他、天理市嘉幡町でもこの弓打ち行事はケイチン講の人達が行なうとある。こう見てくるとケイチンと弓打ち行事とは密接な関係があり、また、ケイチン講、ケイチン座などのことばから、ケイチンの組織があったことがうかがわれる。

このケイチンの意味を和歌森太郎氏は、「結は結衆で、結衆は信仰団体である。鎮は神霊を鎮め奉ることで、年頭に当って結衆の幸福を祈り、同時に結衆のために諸鬼神を鎮めるべく弓を天地四方に放ったのが結鎮祭でけちん又はげちんといっている」と述べている。これによると、結は信仰団体あるいは講集団で、鎮は神をまつることであると考えられている。もう少し述べれば、このケイチンと呼ばれる信仰団体が、もちろん弓打ちのみではないが、この弓打ちを中心的な行事として存在するものと考えられる。その点を次の例によって示しておこうと思う。

まず天理市荳原の『荳原村座主年中行事安永四年(1775)九月改之』には次のようになっている。

五日、堂のおこなひ御明シ者座主之教程ともし、大ふく、小ふく等之そなへものは結鎮頭よりするや、御酒餅御供三ヶ日そなへ候を、五日晚二けちんどう之ものと宮本拾壺人寄合ひらくなり、但シ小つけ飯米代味噌は宮本より、大根、いも、などハけちんどうよりいたし申候

(中略)

十六日、いぞめ結鎮頭より勤ム、花かづら御神酒三合、但かれらけ頭屋より出ス也、まと矢三歳也

五日の堂のオコナイの準備やその晩の集会の食事をまかない、十六日の射初めなどを、ケイチン頭の人が勤めていることが解る。

以上見てきた通り、弓打ち行事はケイチンと呼ばれる集団が、正月に五穀豊饒と村人の無災を念じるため行事で、奈良県下ではかなり古くから行なわれていたことが知られる。また弓打ちをすることについて、鬼を退治した伝説なども附いていたのである。

注①『奈良県総合文化調査報告書都介野地区』昭27年刊

②『針ヶ別所村史』昭44年刊

③ 三郷町南畑住 奥田利一氏談

④『和州祭礼記』昭12年調査

⑤⑥ 同上 昭12年調査

⑦『香芝町史史料編』昭51年刊

⑧『日本の民俗 奈良』

⑨『和州祭礼記』昭19年刊

⑩『天理市史史料 一卷』昭52年刊



田原本町北阪手の華鎮祭(『和州祭礼記』より)



天理市上仁興の弓打ち行事

雨乞い与人形

松崎 憲三

はじめに

雨乞いに人形を用いる習俗については、高谷重夫氏によって既に報告されているが、和歌山県粉河町、兵庫県淡路島の事例を除いては、全て大和のものであった。人形を用いるといっても、願満に際して操芝居を奉納するというもので、大和ではこの他二例ほど確認されている。高谷氏の報告とも重複するが、先ず大和におけるこの種の雨乞い方法を紹介し、次いで人形を燃す、あるいは川に流すことによって雨乞いをするという習俗を紹介したいと思う。操人形による方法は、現在までのところ畿内に限られているようであるが、後者の場合は九州及び東北のものであり、その類例は数少ない。では最初に大和における雨乞い方法を、近世資料から窺がって見ることにしよう。

(一)

田原村大野（現奈良市大野）の住人で郷土の山本平左衛門忠辰なる人物は、延宝四年に家督を継いでから享保五年に世を終えるまで年に日並日記を書き続け、現在その三分の一が現存するそうであるが、その中に雨乞い関係の記載があつて、たとえば享保二年(1717)の条に、

八月二十一日 今井堂社操興行 上留利国姓節 大夫丹波市 是願覧 去夏 請雨 一家令見物

八月二十二日 微雨如霧 東風少音信 已之以後不絶雨
中庄村使有之 操令興行為見物可来 云々 雨故不行也(中略) 上留利天神記 云々

八月二十三日 申時洪雨 此瀬村操有之 依招自吉田家見物(中略) 上留利 国姓節 二段終起座(中略) 未之時始、令遅々故 三段過日既没 見物中、役者等起座、夕飯喫云々(中略) 於吉田家夕飯饗応、夜又操二段而意之後、依所望女楠木二段語、芝居終、子

時各飯家

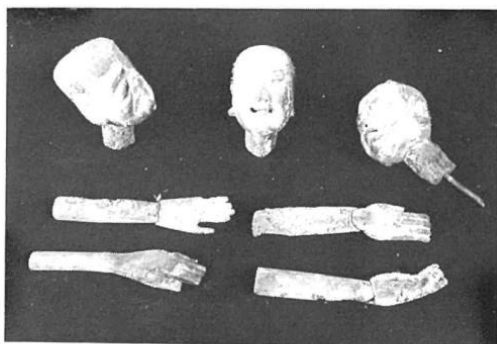
八月二十四日 永谷村操興行 役者丹波市 自此漸赴此 右彼里
宮遷意故 諸式丁寧執行 云々
役者雇賃白銀百五十目云々、田原雇賃各少克也

と記されている。これによって操芝居が遷宮に際して、あるいは願満時に、各在所で盛んに行なわれていた様子が理解できる。さらに文政三年(1820)に出された郡山藩『村方取綿御触書』の条文の一つに

於 郷中 日時月待 号、村中寄合五穀成就之祈祷相頼候杯と申、其村々寺社へ相集り候儀可 為 無用 事
但、雨乞願満之節、燈籠或 人形子とも踊之類、是迄之通御代官所 願差図次第可 申合 操芝居相撲之類、其外芸者雇候様成事 決 可 為 無用 之事

とある。^{註(3)}このお触れは儉約令、領民統制令として出されたもので、冠婚葬祭の様式から庶民の日常生活全般に至るまでこと細かに規制しているが、この条文から郡山領内において、当時操芝居を雨乞い願満時に奉納する風習が広く行なわれていたものと推測される。また操芝居の他、人形を燈籠同様に奉納することも、雨乞い方法の一つとして存在していたことが知れる。

こうした例は五条市丹原にもあつて、ここでは大正末期から昭和初期まで行なわれていたようである。丹原では雨乞いの式を御霊神社で行なってから、コウリトリをして、効験がなければ丹生川神社の社殿で子供の人形を踊らせたり、大阪から雇って来た人形芝居をさせたことがあつたという。そうしてこの人形を踊らせることについては、神様が人形の踊りを嫌われるからとも、逆に人形踊りが好きだからとも伝えられている。また人形を神さまにオマシたともいう。^{註(4)}この五条市丹原と郡山に見られた人形をオマス、奉納するという習俗は一体何を意味するのだろうか。



雨乞い人形 (山添村広代)

それはさておくとして、最後に山辺郡山添村広代の事例を紹介しよう。この方法による雨乞いは大正初期に行なわれて以来絶えているが、当博物館にその時使われたと思われる人形の頭と手、足およそ九体分が収蔵されている。これらは雨乞いの願果たしに用いられたもので、村の巧者が氏神に集まって先ず藁人形を作り、次いでこの頭、手、足を取りつけ、さらに各家々から調達して来た衣装、刀剣の類を歌舞伎十八番等の綿絵を手本に飾りつけ、境内に立て並べたという。ここでは単に立て並べたとだけ伝えられているが、おそらく人形芝居を演じた態にしたものと考えられる。

以上から、操芝居奉納による雨乞いは近世から大正末年に至るまで、大和各地でしきりに行なわれていたことが知れるが、雨乞いの形式の上からは、氏神祈願による雨乞い方法の一つと見なすことができる。では次いで、人形を川に流したり燃やして雨を乞う風習について見ることにしよう。

(二)

この種のもので最もよく知られているのは、古川古松軒の著わした『西遊雑記』に記されている、肥後求摩郡水服における天明三年(1783)の雨乞いであろう。周知のことと思われるが念のために紹介すると、数十ヶ村申合せの上海岸に小屋を造って女人の藁人形を祀り、「籠神籠王末神様へ申す、浪風しづめ聞めされ、姫は神代の姫にて祭り、雨をたもれたもれ、雨がふらねば本草もかれ、人だねも絶へる、雨をたもれ、姫をましましよましましよ」と雨が降るまで唱え、もし雨が降れ

ば藁人形を海へ流したというもので、これは人身御供の名残りだという。^{AE(5)}

雨乞いその他のため、龍神に人身御供を捧げるという伝説は各地に数多く存在するが、実際人形を使ってこのような所作を演ずるといふ例は少ない。しかし『筑紫野民譚集』には次のような話がある。

筑後山門郡山川村に雨乞ひの淵という所がある。壇浦で敗北した平家の落武者がひそかに筑後に入り飯江川の上流要川から物見塚附近にかくれたけれど源軍のため追跡せられ或は打たれ或は傷つき残るものは僅かに六人、そのうち五人は肥後五箇庄まで遁れたが一人この国障子ヶ岳にかくれ後年一部落をなし平村と称した。この村では自分達の先祖が大政大臣の族であるとなし今なほこれを現人神として祀って居る。丁度その頃是等の落武者と行動を共にした一女性があった。中原の青々谷にかくれたが源氏方の搜索が嚴重であつたから逆に今の平家塚と称するもの、東方約十町許にある高さ一丈七八尺もある飛瀑の深淵に身を沈めて死んだ。土俗伝えた入水の姫が今も大鯰となつてこの淵の底深く住んでいるとなし南側に姫の霊を祀り七霊社と称している。そして旱魃の際には村民この社に詣で姫の木像を淵に投じて雨を乞へば必ず験があると伝へられて居る。^{ZE(6)}

この伝説は平家落人伝説とも結合しているが、要するに雨乞い儀礼における人身御供の存在を暗示しているに他ならないだろう。神仏を水に浸すことによって雨を乞う方法は確かに広く認められるところであり、その方法の説明譚としてこの伝説が語られているといった見方もあろうが、その場合、この姫の木像を淵に投げ入れると何故に雨が降ると見なされるかが説明されなくなる。

伝説の祖型は時代の変化に伴って容易に改変され、また伝承されていく過程で話の内容が欠落し、つじつまが合わなくなることはありうることだからして、一々個々の内容を詮索するのは無意味だと言ってしまえばそれまでだが、伝説が必ずしも歴史的事実を語りはしないとしても、それが物語る表面的内容の背後に隠された、潜在的思考を汲み取る努

力はなされなければならない。つまり筆者の見解では、木像は姫そのものであって、この木像を淵に投げ込み、模範的に人身御供として捧げることによって雨乞いをしたのではないかと考えられるのである。

みそぎ・水垢離による雨乞い方法の中に、村の一員なり山伏、禰宜等を無理やり淵に落とす、たたき込むという例が少なからず存在するが、一つのショウとして人身御供が捧げられているのではないかとの疑いから、これと同種のものと思われる筑後山川村の雨乞い方法と伝説を紹介した。

さて、以上の二例とは異なり、人身御供と称して藁人形を燃やし雨乞いをするのが、大正十三年に岩手県胆沢郡金ヶ崎村字齋度谷地で実際に行なわれた。^{FE(7)}七月十九日付の岩手日報に次のような記事が掲載されている。

火葬にして人身御供の雨乞ひ

天道様も聞へぬと祈願をこめたら雨蕭々と見出しがあって、

致底降雨の見込がないので金ヶ崎、南方両部落民は十八日駒形神社に雨乞ひの祈願をこめそれより南方小学校に於て相談を開き字齋藤谷地桂房吉(五六)は旧五月四日午後三時頃まで田搔きをしたので「お駒様」のおいかりにふれ小雨が降らないのだといので全人を字壇原において火葬に附して人身供養として(実はそれは人形なのである)送り雨乞ひをしたところ空は急に曇り雷鳴がしてたちまち降雨となつたので一同は大いに喜び十九日も五六百人の村民は雨乞ひをする筈である。

と報道されている。つまりある村人が禁制を犯し神の機嫌をそこねたので、彼を人身御供として捧げることによって神意をなごめ、そうすれば雨が得られるとの発想から実際に行ない、効験が認められたというのである。

結びにかえて

さて、人身御供の伝承を伴う雨乞い習俗をいくつか紹介してきた訳であるが、大和には人身御供と称する供え物を神に捧げている神社が、奈良市西九条倭文神社(蛇祭)、菟田野町上平井の八王子神社の他四、五社存在する。人身御供といっても、倭文社のように

ワラヅトに芋・餅を串刺しにして、芋に「へのへのもへ」と書いたもの等で、おおよそ形式的なものであるが、かつて実際に行なわれていた名残りであるかは別として、神に人身御供を捧げるという信仰自体は、今なお確かに存続しているのである。また、木像を淵に投ずる、藁人形を川に流す、あるいは燃すという様々な形で、各地の雨乞い儀礼においても模範的にではあるが、人身御供を捧げる風習が存在していたことが確認された。

しかし、だからといって五条市や郡山の人形をオマスという行為が人身御供として捧げられたと結論付けるのは早計であろう。何らかの形で使用された後奉納されたと見ることもできる。異形(多くは大蛇形)の水神・農神を迎え祭る古代農耕祭式において、ワラやカヤの蛇縄を齋女が祭り、供饌を行ない、また豊饒呪術としてヨリシロの人形を使用することもあったということであり、こうした習俗と接続するのか否かといった点も考慮しつつ検討されなければならない。さらに藁人形を燃す、川に流す習俗についても、旱魃をもたらす邪霊の依代(神送り)といった視点からも検討されなければならない、いずれにせよ人形を用いる雨乞いについての報告が待望されるのである。

註1)高谷重夫「雨乞面〜雨乞と芸能(一)〜」昭和41年

(2)平山敏治郎「大和田原郷の雨乞史料」(『日本古文化論攷』所収 吉川弘文館 昭和45年)

(3)奈良教育大学木村博一教授ご教示による。

(4)『五条市史』 昭和33年

(5)古川古松軒「西遊雜記」(『日本庶民生活史料集成』第三卷所収 三一書房 昭和44年)

(6)及川儀右衛門『筑紫野民譚集』 郷土研究社 大正13年

(7)高谷重夫「雨乞の一方法・みそぎと垢離」 近畿民俗55号 昭和47年

(8)高谷氏によれば、この他対馬にも藁人形を用いる雨乞い習俗が存在したという。

(9)松前健「大岐大蛇神話と農耕祭式」(『日本神話の形成』所収 塙書房 昭和45年)

博物館事業報告 (昭和53年) (1月～12月)

吉岡 豊

◀博物館事業▶

～展 示～

昭和52年12月4日～昭和53年3月28日

常設展 食制具～儀礼とうつわ～

昭和53年4月2日～9月24日

常設展 農具～脱穀と調整～

10月1日～11月26日

特別展 織物とその技術

12月2日～昭和54年3月27日

常設展 木と民俗～樹・その利用と信仰～

～移動展～

3/15～3/31 南都銀行郡山支店 (耕起用具)

3/10～3/26 南都銀行本店 (農具)

6/23～6/25 御所市公民館

(大和売薬とその周辺)

9/21～9/27 南都銀行郡山支店 (田植用具)

9/26～9/26 南都銀行本店 (織物)

12月24日 シメナワづくり

～民俗講座～

5月14日 「中国の農具」

元大阪市立大学教授 天野元之助氏

「機械としての農具」

京都大学名誉教授 藪内 清氏

10月15日 「庶民の織物」

当館学芸員 芳井 敬郎

「原始古代の織物」

文化財保護審議会専門委員 太田 英蔵氏

11月12日 「初歩のはたおり実習」

～民家講座～

9月10日 「民家の発達史」

大阪工業大学教授 青山 賢信氏

「民家保存の考え方」

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮

跡発掘調査部長 工藤 圭章氏

～親と子の民俗教室～

7月29日～7月30日 「ワラ細工実習」他

～民俗資料燐蒸～

8月13日～8月16日 収蔵庫

10月17日～10月18日 新規収蔵資料

～印刷物～

研究紀要第2号

博物館だより Vol. IV No. 4～Vol. V No. 3

織物とその技術～紡織技術へのいざない～

(図録)

◀広報活動▶

～テレビ～

5月7日 萩原家住宅紹介 (奈良テレビ)

5月17日 「農具」展紹介 (NHK UHF)

5月18日 「農具」展紹介 (NHK 640)

5月30日 体験学習講座チマキづくり紹介
(奈良テレビ)

8月8日 博物館紹介 (NHK 640)

11月 「木と民俗」展紹介(奈良テレビ)

12月24日 体験学習講座シメナワづくり紹介
(奈良テレビ)

～新 聞～

1月11日～ 「やまとの民俗」

(朝日新聞奈良版連載中)

民俗資料収集状況

分 類	46. 10 ～52. 12	53. 1 ～53. 12	分 類	46. 10 ～52. 12	53. 1 ～53. 12
衣	847	5	社会生活	698	0
食	1203	6	信 仰	502	55
住	1034	0	民俗知識	447	0
生産・生業	2860	39	民俗芸能	98	1
通信・交通・運輸	308	2	人の一生	130	3
交 易	543	0	年中行事	38	21
合 計			8708	8708	132

～体験学習講座～

1月22日 凧づくり

2月26日 カンジョウナワづくり

3月26日 フゴづくり

4月23日 ザルづくり

5月21日 三宝づくり

6月25日 チマキづくり

7月23日 竹櫃(飯フゴ)づくり

8月27日 カサづくり

9月24日 タビづくり

10月22日 ワラジづくり

11月26日 雪くつつくり

- 3月24日 体験学習講座ワラフゴつくり紹介
(サンケイ新聞)
- 4月18日 「農具」紹介 (読売新聞)
- 4月22日 研究紀要発刊の紹介 (読売新聞)
- 5月16日 体験学習講座三宝つくり
(奈良新聞)
- 6月3日 旧萩原家住宅・旧赤土家離れ紹介
(毎日新聞他)
- 8月9日 旧鹿沼家住宅の移築について
(毎日新聞)
- 10月28日 「織物とその技術」展紹介
(朝日新聞他)
- 12月7日 「樹・その利用と信仰」展紹介
(朝日新聞他)

◀日記抄▶

- 1月11日 帝塚山大学博物館実習
- 1月14日 文化庁(木下氏)来館
- 2月18日 和歌山県教育委員会来館
- 2月24日 国土庁職員来館
- 3月22日 伊丹市立博物館来館
- 3月24日 民家専門委員会
- 3月28日 民俗専門委員会
- 4月5日 栃木県知事一同来館
- 6月17日 和歌山市教育委員会来館
- 6月22日 民家集落博物館々長来館
- 6月28日 伊丹市立博物館来館
- 7月18日 花園大学博物館実習
- 7月21日 甲南女子大学博物館実習
- 7月26日 立教大学博物館実習
- 8月9日 日本民俗学会見学
- 8月22日 兵庫県教育委員会視察
- 8月27日 千葉県佐倉市教育委員会視察
- 10月28日 竜谷大学博物館実習
- 12月15日 帝塚山大学博物館実習

◀管理・運営▶

～職員～

学芸主事 芳井敬郎

館長 川内一郎 ♫ 松崎憲三

次長 山下 勝 ♫ 大宮守人

総務係長 井村 操 ♫ 浦西 勉

主事 和田泰子 建造物係長 長谷川晋平

♫ 富畑るみ ♫ 技師 今西良男

♫ 吉岡 豊 施設係長 藤常利明

嘱託 岡崎梅吉 ♫ 技師 井上広和

学芸係長 奥野義雄 ♫ 技師 倉窪 孝

～人事移動～

主事井村操転入、主事松田敏信転出(7月1日付)。技師長谷川晋平転入、技師松田敏行転出(9月1日付)

～民俗専門委員会～

平山敏治郎(成城大学教授) 堀井甚一郎(奈良教育大学名誉教授)、林 宏(奈良教育大学教授)、岸田定雄(東大寺学園教諭)、

～民家専門委員会～

杉山信三(京都市埋蔵文化財研究所々長、近畿大学教授)、工藤主章(奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長)、吉田 靖(奈良国立文化財研究所建造物室長)、青山賢信(大阪工業大学教授)

～昭和53年度予算～

(単位千円)

民俗博物館運営費 104,179

職員費 55,981 管理費 37,013

研究調査費 2,621 広報費 3,458

運営費 5,106

公園整備事業費 176,480

◀公園等整備事業▶

～民 家～

旧萩原家住宅(県指定)・旧赤土家離座敷復原完了(昭和53年3月)。旧鹿沼家住宅復原完了予定(昭和54年3月予定)

～公園整備～

	52年度まで	53年度完成予定
公園完成面積	9.4ha	
園路延長	1747m	200m
便 所	1棟	1棟
休 憩 所	1棟	
パ ー ゴ ラ	1基	
池	1ヶ所 530㎡	1ヶ所 300㎡
植 栽		
高 木	910本	100本
低 木	22,200本	600本
芝 生	2,980㎡	300㎡

寄贈民俗資料分類目録

(昭和53年)
1月~12月

昭和53年1月より12月に至る間、40名の方々から132点に及ぶ民俗資料をご寄贈いただきました。ご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。

分類番号 調査番号 民俗資料名 数量 採集地 寄贈者氏名 備考

■ 衣・食・住 ■

【A】服飾

A-A	1024	麻袋(非常用持ち出し袋)	1	生駒市一分	藤本均
	992	番傘(製作工程品)	1	吉野町宮滝	山田実
	994	〃	1	〃	〃
	993	番傘	1	〃	〃
	1027	シユロミノ	1	五條市野原	福井栄次

【B】食事

B-B	963	水ガメ	1	奈良市西大寺小坊町	鮫田喜久治
B-C	984	ナベ	2	田原本町宮古	田中茂太郎
	985	モチ米洗い	1	〃	〃
B-I	975	飯フゴ	1	奈良市南京終	中西浩文
	1029	箸見本一式	一	下市町下市	小川泰平

■ 生産・生業 ■

【D】農耕

D-C	981	箸抜き	3	田原本町宮古	田中茂太郎
	1036	カラウス	1	〃	〃
	976	サセキ自動収摺機	1	〃	〃
D-D	1017	アワボー・ヒエボー	1	八王子市上恩方	菱山忠三郎
	1035	太鼓のバチ	1	野迫川村弓手原	中上武二
	1030	亥の子暴れ祭々具一式	一	桜井市高田	高田区代表 島岡隆

【F】漁撈

F-C	991	タモ	1	天理市中之庄	辰田源治
-----	-----	----	---	--------	------

【H】養蚕

H-A	988	織り蓐器	1	〃	〃
	989	マユトリ器	2	〃	〃
	990	オリワラ	3	〃	〃

【J】染織

J-B	1032	糸車	1	大和郡山市新町	山本達夫
	1033	整経台	1	〃	〃
J-C	1031	木綿機	1	〃	〃

【K】手工・製造

K-B	969	ザル(半製品)	7	山添村中峯山	平田広
	970	ザル	4	〃	〃
	1034	曲物製作用具一式	一	天川村洞川	橋田由太郎
	987	油紋り器	1	天理市中之庄	辰田源治

【L】諸職

L-B	982	大工道具一式	一	田原本町宮古	田中茂太郎
	971	鍛冶屋道具一式	一	斑鳩町三井	溝口立子
	1010	ガンガリ	2	奈良市今小路	河合和一郎
	1011	フゴサ	1	〃	〃
	1012	ガンガリ	1	〃	〃
	1013	綿操器	1	〃	〃
	972	檜木製作道具一式	一	御所市西柏	有江公司
	1025	〃	一	五條市野原	福井栄次

■ 【M】交通・運輸・通信 ■

M-B	996	チンチヨ	1	奈良市北市町	宮本隆夫
	1026	縄モッコ	1	五條市野原	福井栄次

■【P】 信 仰 ■

P-C	967	三	方	1	下市町下市新町	吉川貞夫
	968	六ツイレコ	(三方)	6	〃	〃
	978	コ	ネ	1	下北山村寺垣内	田の上義一
P-D	972	オ	コナイ	1	東吉野村小栗栖	柳井治良左エ門
	973	〃	〃	1	東吉野村小	辻本利雄
	966	カンジョウ	ウナワ	1	大和郡山市矢田端田	主人神社左座
P-E	977	ケ	ズリバナ	1	下北山村寺垣内	田の上義一
	979	〃	〃	2	下北山村浦向	和田恭一
	980	カ	ンザシ	1	下北山村上桑原	西村哲三郎
	986	ケ	ズリバナ	1	十津川村小原	山村定孟
	1014	〃	〃	1	十津川村檉原	松実定美
	1016	〃	〃	2	十津川村永井	西定秋
	1021	〃	〃	6	上北山村西原	梅迫吉四郎
	1022	材	木(模 型)	1	〃	〃
	1019	チ	ン	1	〃	〃
	1023	ヘ	ノ	2	下北山村浦向	和田利作
	1000	ゴ	オーさん	3	野迫川村弓手原	上口久次
	1001	モ	リモノバナ	2	〃	〃
	1002	ハ	ナ	7	〃	〃
	1003	ヘー	ボー・ツチ	1	〃	〃
	1004	カズラと押し棒	(模型)	1	野迫川村北今西	北今西区代表 中迫喜之助
	1005	カ	ケノモチ	1	〃	〃
	1006	タ	テバナ	2	〃	〃
	1007	モ	リモノ(模 型)	2	〃	〃
	1008	シ	ヨウジキ	2	〃	〃
	1009	午	五宝印	1	〃	〃
	964	農	耕絵馬(複製)	1	当麻町尺土	野志高雄
	965	提	灯棒	1	田原本町材木町	中山善雄
P-F	1015	ス	ギタマ	1	桜井市三輪	大神神社
P-I	1037	カ	マド(祭礼用)	1	川西町結崎	松下初一

■【R】 民俗芸能・娯楽・遊戯 ■

R-H	1018	ソ	リ	1	東吉野村小	戌亥享
-----	------	---	---	---	-------	-----

■【S】 人の一生 ■

S-C	983	チマキつくり用樹	3	田原本町宮古	田中茂太郎
-----	-----	----------	---	--------	-------

■【T】 年中行事 ■

T-A	997	フ	ク	5	野迫川村平	南谷賀孝
	998	ア	ワ	5	〃	〃
	999	コ	メタナムシ	3	〃	〃
	1028	カ	ギヒキ祭具一式	一	山添村菅生	上浦藤一
T-B	995	オ	ニノメツキ	5	上北山村小椽	奥村耕造
	1020	ヤ	キクサシ	2	上北山村西原	梅迫吉四郎

寄贈図書資料目録 (52/1~53/7)

〔書 名〕	〔巻数〕	〔寄贈機関名〕
奈良県立図書館蔵書目録 1 巻～3 巻		奈良県立図書館
平塚市所蔵美術品目録		平塚市博物館
美術館蔵品図録第 1 集浮世絵		奈良県立美術館
新収品目録(昭和51年)		致道博物館
帝塚山大学逐次刊行物目録		帝塚山大学
奈良県文化財図録Ⅸ		奈良教育委員会
瀬戸内海及びその周辺地域の漁撈用具収蔵目録		

瀬戸内海歴史民俗資料館
新指定重要文化財図説(昭48年度)

文化庁	奈良県教育委員会
奈良県指定文化財第18集	東大寺図書館
東大寺蔵書目録	大阪府教育委員会
大阪府文化財総合目録	大阪府立図書館
柏原家文書目録	同 上
朝日新聞文庫目録	奈良県立橿原考古研究所
大和考古資料目録	津山市郷土資料館
展示目録	神奈川県立博物館
神奈川県民俗資料分類目録	
〔年 報〕	
橿原考古学研究年報1974・1975	
調査研究年報第 2 号	奈良県立橿原考古学研究所
	青森県立博物館

C

上和田の民俗 与繩の民俗 伊丹文芸資料 南都仏教第38号 近江地方史研究1～6 春日9～14・16～18 鹿児島民俗66・67合併号 日本文化史研究1～2 民俗と歴史第4号～第5号 置賜民俗第53号 奈良文化研究1号～2号 雑誌 朱10・11・13・15・16・18～21 広島民俗第8号～第9号 昔話伝説研究第5号～第6号 えちぜんわかさ1号～4号 秋田民俗4号～5号 地域研究いたみ第8号 伊丹史学第3号 福島民俗第5号～第6号 岡山民俗特輯 まつり文化3 がらくた7号～8号 モンキーVol20—3～Vol20—6・Vol21—1～Vol21—3 民芸手帖52年1月号～12月号・53年1月号～7月号 歴史手帖52年1月号～12月号・53年1月号～7月号 日本の民芸255～273 ニューライフ53年1月号～12月号・53年1月号～7月号 月刊みんぱく52年1月号～12月号・53年1月号～7月号 聖徳71号～76号 御影史学論集 農村文化論集1集 加能民俗研究5 民具のつくり方1～5	都留文科大学民俗学研究 同 上 伊丹市博物館 東大寺図書館 近江地方史研究会 春日大社社務所 鹿児島民俗学会 帝塚山短期大学 民俗と歴史の会 置賜民俗学会 桜井史談会 伏見稲荷大社 広島民俗学会 昔話伝説研究会 福井民俗の会 秋田県民俗研究会 伊丹市立博物館 伊丹地方史学会 福島民俗学会 岡山民俗学会 まつり文化の会 置賜民俗資料館 日本モンキーセンター 東京民芸協会 名著出版 日本工芸館 国立民族学博物館 法隆寺 御影史学研究会 農村文化研究所 加能民俗の会 川崎市立日本民家園	〔単行本・図録〕 御杖村史 木曾奈良井 三宅町史 黒滝村史 生駒市史 今井町史 第3世代の学問 生のかたち 科学者の疑義 海と人間 大和郡山小風土記 アイヌのはれ着(上) 北九州市の文化財 江戸川歳時記 大和とその周辺 寺社縁起 神々と村落 古代のうつわ 奈良町風土記 甲州道の研究 大和の星 イタリア古版画展 ロシア美術館名作展 現代美術の鳥敢展 フォンタネージ・ラグーザ展 金鈴社の画家たち 奈良県のくらし 山形県100年のあゆみ展 歴史のなかの印播沼 さぬきの農村歳時記 滝ととも連水 観音菩薩 山に生きる 東北の古墳 紀伊国(奈良・平安時代の生活と文化) 鳥海青児と昭和の画家たち	御杖村役場 奈良国立文化財研究所 三宅町村役場 黒滝村役場 生駒市役所 中西文山堂 エッソスタンダードkk広報部 同 上 同 上 海の博物館 平城文庫シリーズ刊行会 天理参考館 北九州市教育委員会 江戸川区郷土資料室 池田原太氏 萩原龍夫氏 同 上 登呂博物館 山田熊夫氏 八王寺市教育委員会 堀江彦三郎氏 京都国立近代美術館 同 上 同 上 同 上 同 上 中本宏明氏 山形県立博物館 千葉県風土記の丘 中原耕男氏 三島市郷土館 奈良国立博物館 北海道開拓記念館 東北歴史資料館 風土記の丘資料館 平塚市博物館 (以下次回)
--	---	--	---

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

3月27日まで

テーマ展 「樹・その利用と信仰」

4月3日

テーマ展 「竹・伝承技術と信仰」

2月11日 民俗文化映画 (PM2～3)

2月25日 体験学習講座〈テマリづくり〉

3月11日 民俗講座 (PM2～4)

講師 松前 健氏 「樹にかかわる神話」

講師 景山春樹氏 「樹と信仰」

3月25日 体験学習講座〈ゾウリづくり〉

《表紙解説》従来山の神にヘノコを奉納習俗は、北山川流域に限定されると見なされていたが、十津川流域、さらには吉野川上流地域でも認められた。しかし外来者によってもたらされたとの伝承はいぜんとして強い。

■編集後記■ 当館も開館以来5年目を迎え県内のみならず近畿一円、さらには遠来からの客人もふえる傾向にある。こうした状況は喜ばしいに違いないが、地域博物館は地元民により繁く利用されなければならない、そうした方針と相俟って目下常設展の一部模様替えが計画されている。と同時に、本誌も漸新な誌面へと衣替えがなされなければならない、かくして古参の編者は、積年の恥を一身に負いつつ幕間へと姿を消す。(尾瀬河骨)